

1 旧県庁跡地での奉迎 （『東宮殿下行啓写真帖』）

大正13年（1924）撮影 当館蔵

大正12年に福井県庁は駅前通りの下馬門前（現西武福井店辺り）から福井城本丸跡に移転し、県庁が去った跡地は空き地となった。この写真には、大正13年の皇太子行啓時、奉迎する人々が旧県庁跡地周辺に群れ集う様子が写されている。

この駅前の一等地は、金融恐慌等の影響で、県が希望する早期の一括売却は実現しなかったが、福井商業会議所書記長であつた坪川信一の尽力により、区画や道路の整備した上での切り売り（入札）が進んだ。

2 駅前通りでの歓迎

（『グリフィス博士福井訪問記録写真帖』）

昭和2年（1927）撮影 当館蔵

昭和2年、お雇い外国人として藩校・明新館で教鞭をとったW・E・グリフィスが再来福した際の駅前通りでの歓迎の様子である。左奥には下馬門とその周辺の石垣が写っているが、資料1の撮影時に存在していた堀はすでに埋められている。

写真の右端には県庁跡地の一部が見えるが、翌年にはここにだるまや百貨店が開店する。

3 福井県織物同業組合織物見本帖

昭和初期 当館蔵

明治以降、福井は羽二重^{はぶたえ}を中心とした絹織物の一大生産地となり、輸出羽二重の半分以上が越前地方産となった。しかし第一次大戦後の不景気の後には絹織物に代わり人絹^{じんけん}（レーヨン）織物が登場し、福井の羽二重産地ではいちはやく人絹織物への転換が進んだ。その結果、昭和15年頃には世界的な産地として名をとどろかせた。

本資料は絹織物から人絹への転換が進む昭和初期の海外向け織物生地の見本帳とみられる。奥付や説明が全くついていないサンプルな装丁で、表紙に「THE FUKUJIKEN TEXTILE GUILD」（福井県織物同業組合）とある。羽二重、人絹と絹の交織、人絹など五十種類のさまざまな生地のサンプルが貼り付けられている。

4 福井県織物同業組合事務所と

人絹取引所（『陸軍大演習記念写真帖』）

昭和8年（1933）撮影 当館蔵

昭和7年（1932）5月14日、元馬場通りの福井県生糸検査所の一部を借りて、全国初の福井人絹取引所が開業した。翌8年には東京、大阪にも人絹取引所ができるが、福井市場での取り扱いには群を抜き、10年には出来高で64%を示した。

5 最新番地入福井市街地図

昭和8年（1933） 当館蔵

陸軍特別大演習を記念して福井新聞社から発行された市街地図で、番地が記入され、各建物の配置図が示されているのが特徴である。また番号をふって市内の会社や商店、病院等の位置を示しているのも資料的に価値が高い。さらに都市計画道路が幅員ごとに色分けして図示されている。

6 写真 だるま屋前

〔石川光陽撮影 「昭和8年大演習記念写真」〕

昭和8年（1933）撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

昭和3年（1928）7月、福井県内初の百貨店「だるま屋」が開業した。創業者の坪川信一は、元教師であつた経験を活かし、だるま屋の経営方針として子ども本位の百貨店を掲げ、子ども向け商品の充実や「コドモの国」の設置などを行うとともに、地元小売業者との軋轢を避けるため、別館に小売業者に貸与するための店舗を設けた。そしてそこでは、商品の陳列、正札の掲示、現金取引を徹底させ、掛け値や帳付けといった旧来の商習慣の打破に努めた。この営業方式は市内の小売業者の大きな刺激となり、経営や商店街の近代化を促すことになった。

7 だるま屋百貨店福井県産品案内

昭和初期 当館蔵

だるま屋で購入できる福井県産の繊維製品からお土産ものまで様々なものを列記したパンフレットである。裏表紙にはだるま屋のモットーが書かれている。

裏表紙

みなさんのためのま屋

お氣に召すだるま屋
お廉くうるだるま屋
責任をもつだるま屋
正札をまもるだるま屋
信用のできるだるま屋

私の

第一の願ひは

みな様のだるま屋としてかはいがつては頂けますまいか

私の

第二の願ひは

みな様のだるま屋として自由にお出入り下さいますまいか

私の

第三の願ひは

みな様のだるま屋として愉快にお遊び下さいますまいか

その上で

若し萬一

お氣に召すものがありましたらおためしに何なりとお求め下されば結構に存じます



だるま屋

福井驛前

電話 一七三〇
一七九〇
一九六四

振替金邊三六七六

8 戦前のだるま屋の夜景

昭和初期

当館蔵

9 福井市役所新築落成記念絵葉書

昭和11年（1936）撮影 当館蔵

昭和10年5月に完成した新市庁舎は、延べ面積1413坪の鉄筋コンクリート造で、1階が事務室、2階が議事堂、3階が公会堂だった。

「駅前通りの盛観」の中央奥に写るのは、昭和11年12月にだるま屋の並びに開店した福屋百貨店である。昭和初期は、だるま屋開業をきっかけにして、駅前通りの商店街化が進んだが、福屋の開店により、市内の商戦は、だるま屋、福屋、商店街の三つ巴で展開されるようになっていった。

10 写真帖 『富久井』ふくい

右.. 幸橋南詰から北を望む

中.. 大名町交差点から駅前通りを望む

左.. 駅前通り

昭和15年（1940）頃撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

駅前的发展に伴い、福井城の堀は埋立てが進み、昭和12年頃には駅前にあつた百間堀もほぼ全てが埋め立てられた。

左の駅前通りの写真に映るのは下馬門辺りの商店街で、ここも大正末年までは堀が巡っていた場所（資料1に写る堀）であつたが、昭和15年頃には近代的な商店街へと変化していた。

11 加藤寛治 ラジオ放送録音盤

昭和10年（1935）10月7日収録 当館蔵

福井市出身の海軍大将・加藤寛治（1870～1939）は、福井藩士加藤直方の長男として福井城下に生まれた。明治24年（1891）に海軍兵学校を卒業して海軍軍人となり、連合艦隊司令長官や軍令部長など海軍の要職を勤めた。

加藤は同郷の先人である橋本左内を尊敬し、左内の顕彰団体・景岳会の会長を昭和5年から没する同14年まで9年間にわたり務めた。

本資料には、昭和10年10月1日から13日まで東京の百貨店・白木屋で開かれた「橋本左内先生生誕百年記念展覧会」の会期中に、日本放送協会東京中央放送局（JOAK）で放送された加藤の講演「偉大なる青年志士橋本左内」が吹き込まれている。

12 『尋常小学修身書』・『師範修身書』

昭和13年（1938） 当館蔵

加藤が景岳会会長に在任していた昭和12年、「修身」^{しゅうしん}の文部省教科書に橋本左内の肖像が掲載されることになった。しかし、左内肖像には左内友人の佐々木権六が描いた作品と、左内没後に福井市出身の画家・島田墨仙^{ぼくせん}が描いた作品の二種があり、景岳会役員の会議ではどちらを選定すべきか決定できなかった。会長として選定を一任された加藤は、心身を清めて南千住回向院の左内墓所に参拝し、暗示を得るよう祈願した末に墨仙画を選んだ。以降、墨仙の画が左内の容姿の代表例として定着していくことになる。

13 加藤寛治書 「至誠努力」

昭和7年（1932）年頃 当館蔵

昭和7年11月、近畿地方で実施される陸軍特別大演習を陪観するため大阪市に入った加藤は、15日に大阪市粉浜尋常小学校を訪れ、児童たちの前で講話を行った。当時、景岳会の会長を務めていた加藤は、橋本左内が著した「啓発録」の中から「立志」や「去稚心」にまつわる逸話を紹介し、児童たちに将来の日本の国運を背負うべく体位向上や鍛錬に勤めるべし、と40分間にわたって語りかけた。

本作は、その縁で粉浜小学校のために加藤が揮毫したもの。しかし、昭和20年8月15日に日本が敗戦を迎えると、教育現場では軍国主義の排除が叫ばれるようになった。その余波を受け、本作は加藤の遺族の下に返却されたという。

14 岡田啓介宛松尾伝蔵筆葉書

大正3（1914）11月5日消印 当館蔵

岡田啓介（1868～1952）は、福井藩士岡田喜藤太の長男として福井城下に生まれた。明治22年（1889）に海軍兵学校を卒業して海軍軍人となり、日清戦争・日露戦争にも従軍した。岡田の妹・稔穂は旧福井藩士家の陸軍軍人・松尾伝蔵に嫁いでおり、岡田と松尾は義兄弟として親しい間柄であつた。

本資料は、第一次世界大戦時にドイツ帝国が拠点としていた清国・青島を日本軍が攻撃した青島の戦いの後に、松尾が岡田の健康と武運長久を願って書き送ったもの。当時の松尾は歩兵第36連隊附陸軍中佐として、朝鮮の咸興宜化町（現在の朝鮮民主主義人民共和国咸鏡南道咸興市付近）に駐留していた。一方の岡田は、第二水雷戦隊司令官として巡洋艦利根に乗艦し、作戦行動の只中にあつた。

15 岡田啓介宛 松尾伝蔵書簡

昭和6年（1931）1月29日 当館蔵

昭和六年三月一日、岡田啓介は同年一月に没した母・波留の納骨のために帰郷した。福井県出身者初の海軍大臣だった「お国の大将」の帰郷は官民を挙げた出迎えとなり、岡田は納骨を終えた後も八日まで嶺北各地を講演してまわった。この講演行脚の企画と調整を担ったのが、当時在郷軍人会福井市連合分会長を務めていた義弟の松尾伝蔵だった。

本書簡は、松尾が本企画の可否と講演の日程について岡田の意向を伺ったもので、松尾の子孫から当館に寄贈された新出史料である。嶺北各地を八日間で周る過酷な日程となったが、「現役のバリく」の英気を発揮し、「福井県之為の犠牲」として諦めて欲しい、と岡田に懇願する松尾の姿が読み取れる。なお、この日程にはのちに地元福井新聞が「大将を虐待したやう」だと苦言を呈している。

16 岡田啓介筆 「行公去私惡」の書幅

昭和10年（20年代） 当館蔵

警視総監官房情報課などに勤めた警察官僚・吉田幾之助の子孫に伝わった岡田啓介の書である。子孫の証言から、吉田は岡田に師事していたとされ、その親交により譲り受けた書と考えられる。

「行公去私惡」は、中国の古典『呂氏春秋』を典拠とする。公正なことを行い、私惡を除く、という岡田の政治家としての心構えが本作から感じ取れよう。

17 岡田啓介内閣総理大臣就任記念朱盃

昭和9年（1934）7月8日 当館蔵

昭和9年7月3日に斎藤実内閣が総辞職を表明し、元老・西園寺公望さいおんじきんもちに推された岡田が第31代内閣総理大臣に就任することになった。福井市出身者としては初となる首相の誕生に市内は湧き立ち、組閣の成った7日には市を挙げての提灯行列が行われた。

本資料は、岡田内閣が発足した8日に岡田家が配った記念の朱盃。なお、岡田家の家計は決して裕福ではなく、組閣にあたっては資金面で大いに苦勞した。猛暑の中でテント村に陣取っている新聞記者たちに慰勞のビールを振る舞うこともできず、氷を少しばかり贈ることしかできなかった。しかし、記者たちは大いに喜び、自ら持ち込んだビールとともに岡田の貧乏に乾杯したという。

18 岡田啓介着用モーニングコート

昭和初期 当館蔵

本資料は、二・二六事件で首相官邸が襲撃された際に岡田首相の寝所のタンスに入っていたもので、襲撃した兵士らが銃撃した弾丸がタンスを貫通し、中にあった洋服にも穴を開けた。

岡田は官邸を脱出する際、この穴の開いたモーニングコートを着用して、死んだとされている自身の弔問客に紛れて、からくも死地を脱することができた。

穴の開いた箇所はその後に繕われており、おそらくそのまま使用されたのではないかと考えられる。現在は黒い布を当てて修繕された状態を見ることが出来る。

19 木内曾益きうちつねのり検事

二・二六事件関係資料

昭和11年（1936） 当館蔵

二・二六事件は、天皇親政による国家改造（昭和維新）を目指す皇道派の陸軍青年将校たちが昭和11年2月26日に蜂起したクーデター事件。

この事件で岡田啓介首相は「君側の奸くんそくの奸かん」とされて暗殺の対象となり、武装した青年将校たちの襲撃を受けた。岡田首相は首相官邸内に身を隠した後に脱出して難を逃れたが、襲撃部隊と対峙した松尾伝蔵首相秘書官や首相護衛の警察官たちが殺害された。本事件の発生を聞いた昭和天皇が武力鎮圧も辞さない強硬姿勢を示したため、「反乱軍」とされた青年将校たちは29日に投降した。岡田首相は本事件の責任を取り、3月9日に内閣総辞職した。

事件後、陸軍は特設軍法会議を設置し、裁判は非公開で進んだ。本資料は、民間側主任検事として事件の処理にあたった木内曾益（大野市出身）が手許に遺したものの。事件翌日の27日から東京市には戒厳令が敷かれたため、被告となった将校たちとの接見には戒厳司令部が発行する出入許可証や腕章が必要だった。事件の首謀者となった安藤輝三（歩兵大尉）や栗原安秀（歩兵中尉）は法廷の場での意見表明を企図しており、接見にあたった木内に「尊皇討奸」（安藤）や「昭和維新」（栗原）と書きつけたメモを託している。特に栗原は死刑判決が下った翌日の7月6日に木内へ書簡を認め、血盟団事件や五・一五事件（いずれも昭和7年、木内が主任検事として担当）の首謀者たちよりも先に死にゆく自らの心境を辞世の句に込めた。

20 福井高等女学校学芸会プログラム

昭和14年（1939）10月18日 当館蔵

昭和14年10月の福井高等女学校の学芸会の次第を記したプログラム。当時は日中戦争のさなかであり、アメリカ、イギリスなどとの関係も深刻な状態になりつつあった。

そのような中での学芸会であり、発表の曲目は軍国的なものもかなり見られるが、西洋のクラシックの曲目も少なからず盛り込まれている。

21 福井高等女学校

修学旅行旅程図とお土産

昭和15年（1940） 当館蔵

福井高等女学校のとある女学生が修学旅行に行った際に配られた旅程図と、現地でおみやげとして買い求めたと思われるしおり、絵はがきである。

旅程としてはまず福井を出発して伊勢参り、さらに奈良県に入って橿原神宮、奈良市内、さらに京都観光と、歴史ある社寺や史跡を訪ねる旅であつたことがわかる。

勾玉形のしおりや女学生らしい趣味のきれいなプリントの絵はがきは微笑をさそう。

22 戦役画帖 御国之誉

昭和11年（1936） 当館蔵

昭和11年発刊の戦争絵画集。慶長4年（1868）の鳥羽伏見の戦いから西南戦争、日清・日露戦争、第一次世界大戦、満州事変や第一次上海事変のころまで、明治～昭和にかけて日本が経験した戦役の様子を絵画と文章で解説している。

昭和11年は二・二六事件で政治が大きく動揺する中、対外的な緊張も増して社会全体が戦時体制に傾いていた時期であり、このような絵画集も愛国心や国家意識を高める目的で多く刊行された。

23 新田公六百年大祭記念 県下学童 美術展・全国小中等学校図画展覧会 出品作品

昭和13年（1938） 藤島神社蔵（当館保管）

昭和13年は新田義貞が戦没してから600年にあたり、義貞を祭神とする藤島神社では記念大祭が執り行われた。これに関連して福井県下、また全国の小中等学校の図画作品展が公募され、それぞれ数百点の作品が寄せられている。

前年には日中戦争が始まり、また後の日独伊三国同盟につながる日独伊三国防共協定の成立により、日本は枢軸国の一員として英米仏などとの対立を深めていった。子どもたちの作品には、駄菓子屋での微笑ましい情景を描いたものなどのほか、そのような時代の雰囲気を感じさせるモチーフも見られる。

24 福井県勢 昭和16年版

昭和16年（1941） 当館蔵

昭和16年発行の福井県の政治・産業・社会・歴史文化など、様々な分野に関するデータを記載した資料。現在の「県勢要覧」にあたる

本来は広く公表されるべき資料だが、表紙に「部外秘」の印が捺されており、国内の詳細な情報が外に漏洩することを警戒している状況がうかがえる。特に出生数や死亡数などのデータは故意に消去された形跡がある。

当時の県内の代表的な工業製品として、繊維製品のほかに醸造物、紙、肥料、藁製品といった品目のデータが記載されているのが興味深い。

25 戦時中の婦人会たすき

昭和8年～17年頃 当館蔵

北清事変（義和団事件）で戦死した兵士の遺族や、負傷して戻ってきた兵士らの救護を目的として「愛国婦人会」が結成されたのが明治34年（1901）のことであつた。また昭和7年（1932）年の上海事変勃発時の出征兵士らの支援をきっかけに「国防婦人会（のち大日本国防婦人会）」が結成された。

一方、自発的に結成された前二者とは違い、福井県国防協会は事務所を福井連隊区司令部においた軍部主導の国防思想普及のための協会で、各婦人会の代表などが協議員として名を連ねた。

26 衣料配給切符

昭和19年（1944） 当館蔵

太平洋戦争中の日本では物資が徐々に不足し、昭和17年（1942）からは衣料品の切符制が実施され、買い物にはお金のほかに決められた点数の切符が必要となった。展示資料は昭和19年交付のもので、大人1人一年分の衣料切符。点数の合計は50点で、1点や2点の細かい切符を切り取って使う。

衣料品の必要点数は作業服上下が30点、半そでシャツ8点、下着5点、靴下・タオル3点などで、結婚間近の女性や妊婦、被災者などは少し優遇があった。

当時の厳しい物資不足がうかがえる。

27 千人針腹巻

せんになんばり

昭和12年（15年頃） 当館蔵

1 mほどの長さの白布に、千人の女性に赤い糸で1人1針ずつ縫って玉どめをしてもらったもの。出征する兵士に贈る風習が日露戦争頃から始まり、日中戦争時には街頭で通行中の女性に協力を求める光景がよく見られた。また各地の婦人会などが組織的に製作し出征兵士に贈ることもあった。この布を身につけると「弾避け」になるという信仰がある。女性の持つ呪力「妹（いも）の力」への信仰がその根底にあるといわれる。

女性たちの「千人針」への奉仕は、当時の新聞などマスコミがこぞつてとりあげたこともあり、「挙国一致」を表わす美談として兵士たちを鼓舞して送り出すような風潮もあった反面、「無事に帰ってきてほしい」という家族の切実な本音もこもった、まさに戦争の時代を象徴するものである。

28 出征者への寄せ書き

昭和17年～18年頃 当館蔵

戦地に出征する人のため、友人・親戚・職場・隣近所の人たちなどが日の丸の旗に寄せ書きして贈ったもの。出征する人は千人針などとともに、戦地にお守りとして携行した。

この寄せ書きには、「武運長久」「義勇奉公」など激励の言葉や歌が、名前とともに添えられている。

持主の方は陸軍歩兵少尉としてアリユーシャン諸島のアツツ島へ出征予定であったが、直前に足を負傷し、アツツ島へ赴くことはなかった。

昭和18年5月には、米軍がアツツ島に大規模な上陸作戦を敢行し、日本軍の守備隊は最後まで抵抗したが全滅。初めて「玉碎^{ぎょくさい}」という言葉で報じられ、国民に大きな衝撃を与えた。

29 軍隊手帳

昭和4年～16年 当館蔵

日本軍の兵士が携行していた手帳。前半には「軍人勅諭」すなわち軍人の心構えを天皇の言葉という形式で示したものが印刷され、その他手帳の取り扱いに関する注意や、応召・出征時の注意が記されている。

後半部分には、所属部隊・階級など身分を証明する情報、さらに部隊の所属歴や戦闘への参加履歴などが記録された。

本資料の持主は昭和4年に徴兵により第36連隊に一等卒として入営、その後、除隊と動員を何度か経験し、同16年まで上海事変や日中戦争に従軍し伍長にまで昇任した記録がある。21歳から33歳にかけて約12年間、断続的に従軍していたことになる。

30 陸軍教練関係資料

昭和19年（1944）頃 当館蔵

旧日本陸軍の第118師団輜重隊に所属していた人が使用・作成した教練関連資料。第118師団輜重隊は中国北部、山西省大同市に駐屯し治安維持や物資輸送等に従事した部隊。

太平洋戦争中のフィリピン・マレー・ビルマ等で輜重（輸送）部隊が経験した戦闘での成功・失敗例をまとめた「戦例集」や、その他の教本を自身で書き写したと思われるノート・メモが見られる。

中には「対戦車肉迫攻撃要領」といった、歩兵が戦車に肉迫して爆雷等で無力化するというかなり危険な戦術や、「挺身奇襲」（圧倒的ナル物量ヲ有スル敵二対シテ劣等装備ナル軍隊ガ使用スル強者ノ戦法ナリ）などのメモもあり、劣勢となった戦争後期の日本陸軍の苦慮の末の戦術が見て取れる。

31 五式戦闘機 部品

昭和20年（1945）撃墜 当館蔵

昭和20年4月7日、陸軍飛行第18戦隊所属の戦闘機操縦士、平馬康雄曹長（福井市出身、当時22歳）は東京上空に侵入した米軍爆撃機B29・戦闘機P51の編隊と交戦、被弾して埼玉県越谷市の水田に墜落した。直後に遺体の一部が回収されたが、大部分は乗機であった五式戦闘機とともに地中に埋もれたままとなった。

昭和44年、越谷市出身で平馬曹長と陸軍少年飛行兵同期であった人が墜落地点を確認、遺族や少年飛行兵の戦友会である少飛会、当時の島田博道福井市長や福井選出の衆議院議員であった坪川信三らの働きかけもあり、昭和47年2月、陸上自衛隊による発掘調査が行われ、遺骨と乗機の部品が回収された。

【燃料タンク切替装置】

エンジンへの燃料の供給先となる燃料タンクを機体本体（胴体部・左右主翼部）、機体下部の落下タンク（増槽）など、必要に応じて切り換える装置。

【過給機（スーパーチャージャー）】

五式戦闘機搭載のエンジン「ハ一二一二」に備わっていた機構の部品。酸素の薄い高度でのエンジン出力維持のための機構。羽根車状のインペラを高速回転させ、エンジンに高圧の空気を送り込み、高い燃焼エネルギーを得る。

【プロペラ】

機首の3枚羽根のプロペラのうちの1枚。強度のあるアルミニウム合金製だが、墜落の際の衝撃で先端がアメのように曲がっている。

32 『敵米機の識別』『敵機一覧』

昭和19年（1944） 当館蔵

昭和19年秋ころから、マリアナ諸島に米軍の爆撃機が運用な可能な飛行場が完成すると、日本本土各地への空襲が本格化する。

空襲への対策として、内務省などの指導の下、国民の防空意識の向上・知識の普及を担った「大日本防空協会」などでは、このような冊子を作成し、一般市民も上空に飛来した飛行機のシルエットや翼のマークを見て、味方機か敵機かを速やかに判断できるよう、図解による啓発を行った。

33 E 46 集束焼夷弾 弾頭（ノーズブロック）

昭和20年（1945） 当館蔵

M 69 焼夷弾を38発内蔵する、いわゆるクラスター焼夷弾の弾頭部。鉄製で重さが約32 kgもある。この弾頭部と尾部の尾翼で空中での姿勢を制御し、中身の焼夷弾を散開させる。

アメリカ軍の資料によると、福井空襲で投下されたE 46 集束焼夷弾は3785発。内蔵されていたM 69 焼夷弾は14万3000発余りにのぼる。その他M 47 焼夷弾（クラスター弾ではない）5651発を加え、合計950トン余りの焼夷弾が市街地に降り注いだ。

34 焼夷弾筒殻（M69焼夷弾）

昭和20年（1945） 当館蔵

福井空襲で使用された爆弾は主にM69焼夷弾と呼ばれたもので、E46集束焼夷弾と呼ばれる親爆弾の中に38発内蔵されていた。鉄製の六角形の長い筒にナパーム油を入れ、信管を付けたもの。本来は先端に布製のリボンが付いておりこれに火がついたものが上空から落下、地面に到達すると破裂して周囲に火炎をまき散らした。

木造家屋の多い日本ではこういった焼夷弾が猛威をふるい、福井市街もおよそ9割が火災で失われたといわれる。

35 写真 福井空襲直後の福井市街

昭和20年（1945）撮影 当館蔵

昭和20年7月19日午後1時から約2時間にわたって続いた米軍B29部隊による爆撃は福井市街地を焼き尽くした。被災面積は約180万坪で市街地の95%に及び、罹災人口率は全国で2番目に高い93%を記録。市民を巻き込んだ無差別攻撃により、近代都市として発展しつつあった福井市街は焼け野原となってしまった。

空襲後の市内では、死体の処理や道路・用水の確保などの作業が開始され、各地からの救援物資や京都師団による給水車も到着し、ありあわせの資材を利用して仮小屋が建てられるなど復旧に向けて動き出した。

36 全国主要都市戦災概況図 福井市

昭和20年（1945） 当館蔵

昭和20年12月、日本の主要都市が見舞われた戦災の状況を、海外から復員帰還した人々にも周知するため、第一復員省（旧陸軍省）により、このような地図が作られた。当時日本に帰還した復員兵士からの質問として上がったのが、概ねまず戦災の概況についてであつたという。

本図を見ると、福井空襲の被害範囲は、旧福井城本丸跡（県庁）を中心に約3km四方となっている。木造家屋が密集した市街地に投下された焼夷弾が猛威を振るつたことがよく分かる。

37 りさい 罹災証明書

昭和20年（1945） 当館蔵

福井空襲の翌日から交付された罹災証明書。
昭和19年夏以降、米軍による日本各地への空襲は激しさを増しており、空襲により被害を受けた人はこのような罹災証明書を発行された。これにより戦災給付金の給付を受けたり、鉄道の乗車券を優先的に発行してもらえたり、避難先でも配給が受けられるよう手配がされたりした。

福井空襲では市役所庁舎も被害を受けたので、野外にテントと机を出し、手探り状態で被災者の救済・相談にあたっていた。展示資料のうち空襲翌日の7月20日付発行のものは専用の用紙として印刷されているが、その数日後の発行と思われるもう1点は市役所の反故紙を利用しており、当時の苦境がうかがい知れる。

38 捕虜日記

昭和21年（1946） 当館蔵

戦後、ビルマ・ラングーン（現・ヤンゴン市）、に設けられたアーロン日本降伏軍人収容所で
の生活が記された日記。歩兵第一一九連隊（本
拠地 敦賀市）所属の方が書いたものと思われ
る。同収容所は劣悪な居住・作業環境下で降
伏軍人たちが労働を強いられたことで知られ
ており、この日記にもその苦勞が綴られてい
るが、筆者は「収容所ハ修養処と心懸けて送
日したいものである：」と苦しい生活を前向
きに捉えようとしている。

ある日、2人に1本ではあるが日本製の「コ
ロナ」という煙草が配られ、戦友と共に数年
ぶりに「内地の香り」を味わった感慨を記し、
「何時までも忘れられないと共に、将来社会に
於て一つの教訓ともなるであろう」と書いて
いる。

39 共助義会々報

昭和23年（1948）1月5日 当館蔵

西太平洋の赤道付近に広がる島々、現在の北マリアナ諸島・パラオ・マーシャル諸島・ミクロネシア連邦に相当する地域は、第一次世界大戦後に日本の信託統治領となり、「南洋群島」と呼ばれ日本人の移住が盛んに行われた。昭和8年当時の同地域の人口約11万人のうち、日本人は7万人余りを占めていた。本資料はそのうちテニアン島に移住したある家の旧蔵資料である。

太平洋戦争中に南方進出の拠点となった南洋群島で、日本の敗色が濃くなった昭和19年には移住者の引揚げが増加し、その援護のため南洋群島共助義会が設立された。

南洋群島共助義会は戦後も活動を続け、帰還者の支援、互助・交流などを手掛けた。昭和31年には財団法人南洋群島協会に改組され、現地での遺骨収集や慰霊事業も行った。事業は現在もNPO法人南洋交流協会などに引き継がれている。

40 戦災遺族への下賜金^{かし}

昭和23年（1948） 当館蔵

昭和19年8月19日から同20年8月14日まで
の空襲で亡くなった人に対し、天皇から下賜
金が支給された際の書類と、実際に渡された
7円分の紙幣。

本資料の旧所蔵者（終戦当時17歳、福井師
範学校女子部の生徒だった）は福井空襲で母
親を亡くし、その10日後に父親が病気で亡く
なっている。昭和23年には小学校の教員とし
て勤務しており、月給が50円ほどであつたと
いう。「母の命の代価」という思いと共に、紙
幣も使うことなく保管されてきた。

太平洋戦争における空襲等の民間犠牲者に
ついては、日本政府はこれまで公式な補償制
度を設けていない。

41 熊谷太三郎筆 予記帳

昭和20年（1945） 個人蔵（当館保管）

昭和20年10月2日付で戦後初の福井市長に就任した熊谷太三郎は戦後復興を主導し、「巻きぎやはんに地下足袋姿で、土曜も日曜もなく現地視察をする熊谷さんは文字通り陣頭指揮でした。寝食を忘れ、熊谷さんにとっても夢中の時代だったのではないですか」（『生きているふくい昭和史』）と評されるほど懸命に働き、市民は復興に向けて大いに叱咤激励されたのだった。

そんな熊谷市長は、毎日予記帳を記しており、翌日以降の職務の備忘としていた。彼の仕事への熱意が垣間見れる資料である。

42 福井地震被害状況写真

（米軍調査部隊撮影）

昭和23年（1948） 撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

昭和23年6月28日午後5時13分（当時はサマータイム）、坂井郡丸岡町付近を震源とする大地震が発生した。戦災から立ち上がり、ようやく復興の目途がついた福井市街地では、建物倒壊とともに火災が発生。木造のバラックが多く、夕飯の調理の火などから燃え広がった炎で、ほとんどの家屋が焼失し、被害は全戸数の95%にあたる16903戸にも及んだ。市街地は再び焼け野原に戻ってしまった。

この写真は、福井市中心部を南側から撮影したもの。右の写真には幸橋、左の写真には九十九橋が写るが、足羽川の河川敷に多くの人が避難している様子が見られる。また鉄筋コンクリート造の建物以外の家屋は、ほとんどが焼失している。

43 写真 福井地震により被災した福井市街

昭和23年（1948） 撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

福井地震の市街地の被災区域は、駅前や橋北の中心街はもとより、西部の花月新町や橋南の毛矢町方面に達し、主要官庁街、金融機関、新聞社、会社、工場、学校、病院、娯楽施設などそのほとんどが倒壊または焼失した。市内中心部で鉄筋7階建ての偉容を誇った大和百貨店福井店は、15度南に傾斜し、しかも火災を起こして無惨な残骸をさらした。

さらに震災から約1ヶ月後の7月24日からの豪雨で九頭竜川くずりゅう左岸堤防が決壊、足羽川・荒川あすわが氾濫し、市内は泥海となる水禍を蒙ったのだった。

44 福井地震の被害を伝える新聞

昭和23年（1948） 当館蔵

福井地震の被害の状況を伝える六月三十日付の中部日本新聞（現・中日新聞）、である。福井市街の悲惨な状況を大きな写真で伝えるとともに、直後から始まっている復旧・復興への動きもいち早く伝えている。

45 熊谷太三郎市長日記

昭和23年（1948） 個人蔵（当館保管）

震災直後、熊谷市長は市役所玄関に「市民の皆様は、百難に屈せず、百折に撓まず、市当局を信賴して、一致協力、再建に邁進されたい」と大書した紙を貼り付けて復興にかける強い思いを示した。

住宅や生活・交通インフラの復旧を行う一方で、震災前から懸案となっていた都市計画を推進し、郊外地区を含めた思い切った区画整理をはじめ、街路の拡張整備、上水道の改良、下水道の敷設、公園緑地・防災施設の整備など、「災を転じて福と為す」をスローガンに、防災を基軸とする近代的文化都市の建設を目指したのだった。

46 昭和24年1月22日四高生来訪に 対する市長応答

（熊谷太三郎筆 市長原稿）

昭和24年（1949） 個人蔵（当館保管）

福井震災からの復興が着々と進む中、熊谷市長は旧制第四高等学校の学生たちの訪問を受けた。本資料は、その際のインタビューを市役所職員が筆録したもの。学生との対話ということもあり、熊谷市長の市政に対する率直な思いが感じられる。

「市長になる迄の苦心と云ふものはないが、市長になってからの苦心は並大抵ではない」という言葉は、戦災と震災という二つの大災難に市長として直面し、復興の陣頭指揮を執り続けた熊谷市長の偽らざる本音だっただろう。

47 福井市街図（福井都市計画予定図）

昭和24年（1949） 当館蔵

福井新聞社が発行したもので、当時の状況を示す市街図を黒色で印刷した上に、都市計画予定図が朱色で重ねられており、両者の関連をわかりやすく示して、市民への理解浸透を図ったものと見られる。

郊外を含めた区画整理や、幹線道路の拡張整備、道路の直進化（城下町らしい鍵折れの道の解消）、公園緑地の新設、駅前広場の整備などの計画が図示されている。

48 写真復興の進む福井市街

（福井市広報課写真帳）

昭和24年（28年撮影） 当館蔵

※AIによる着色加工

復興都市計画により、大名町通り（現フェニックス通り）や本町通りなどの幹線道路の拡張、駅前大通り・駅前広場の新設などが進められ、市内の交通事情は改善していった。また道路整備に並行して、下水管の敷設工事が進められ、福井市の下水道普及率は飛躍的に向上した。

49 熊谷太三郎歌集 『不死鳥の歌』

昭和40年 当館蔵

熊谷太三郎は、旧制一校在学時にアララギ会に入会するなど、歌人でもあった。昭和40年にえちぜん豆本として刊行された『不死鳥の歌』には、震災や戦後復興期に詠んだ短歌が載せられており、熊谷市長の心情がよく表されている。

50 熊谷太三郎筆 「復興の足どり」

（雑誌『新都市』福井市特集号）

昭和25年（1950）2月1日発行

個人蔵（当館保管）

熊谷市長が寄稿した「復興の足どり」の原稿と雑誌本体である。本文の中で熊谷市長は、戦災後の約4年間で、予想以上に都市計画が進んだと評価している。道路建設、区画整理、下水道敷設、公園整備などは、形の上ではかなり完成に近づいたが、道路や下水道を造るだけでは、都市計画の真の完成ではないとも述べている。新しい道路にふさわしい建物を建て、防火・衛生・景観を維持し、施設を正しく活用する市民の意識が必要だとも主張している。戦・震災で二度壊滅した福井市を元の姿へ戻すのではなく、将来を見据えた新しい文化都市として再建するという強い意気込みが感じられる。

51 吉田茂首相の万年筆

昭和初期 当館蔵

サンフランシスコ平和条約調印式において、吉田茂首相はアメリカ側が調印用に用意したシェーファアの万年筆を使用せず、持参した自分の万年筆で署名したとされている。この時に吉田が使用した万年筆については、公式記録には明記が無くはつきりしないが、吉田が記念として当時親交のあった坪川信三氏（福井市長、衆議院議員を歴任）に譲ったというのが本資料である。

形状や内部の刻銘から、シェーファアと同じくアメリカの万年筆メーカー、パーカーのParker51 Flighter めみられる。

52 東郷青児 とうごうせいじ 「絹の精」

（福井復興博覧会ポスター原画）

昭和26年（1951） 福井市蔵 油彩画

昭和27年に開催された福井復興博覧会のポスター原画として制作された油彩画。手がけたのは当時すでに二科会の重鎮でモダニズム画家として知られた東郷青児であつた。

当時の福井新聞記事（昭和26年10月30日朝刊）によると、博覧会事務局の囑託職員が東郷に師事していたことがある縁で依頼が行われ、「繊維博」の、特に「シルクの女性的な感覚が制作意欲をそそり、いままであまり描かなったポスター原画を快諾」したという。

原画制作だけでなく、ポスター印刷についても東郷が指導監督を希望し、印刷は東京で行われたとされている。

53 福井復興博覧会御案内

昭和26年（1951） 個人蔵（当館保管）

福井復興博覧会は、昭和27年4月10日から6月25日（当初は6月10日までだったが6月25日まで延長）までの約2カ月にわたり、第1会場（現福井大学文京キャンパスとその周辺）と第2会場（足羽山）を会場とし開催された。基幹産業の繊維に関するパビリオンを中心に、七百回大遠忌法要にあわせた道元禅師奉賛館、芸能センターなど多彩なテーマのパビリオンが設置され、また郷土博物館（現自然史博物館）、県繊維工業試験場、足羽山公園などの整備がこれを契機として行われた。

54 写真 福井復興博覧会

（福井市広報課写真帳）

昭和27年（1952）

福井市蔵

※AIによる着色加工

第1会場には繊維、産業をテーマにしたパビリオンがあり、織物製品を購入できる織物デパートもオープン。復興博覧会は、「繊維博」とも題され、戦震災からの復興のみならず、福井の基幹産業である繊維産業を広くアピールする場にもなった。全国有力メーカーの出品した当時のファッションの先端に行く近代的織物は、来館者の注目を集めたという。また第2会場は、主に子供たちを対象とした施設で構成され、「おとぎの国」、動物園、飛行塔、ジオラマ汽車などの遊具が数多く設置され人気を博した。

55 『商工福井』 福井復興博覧会特輯号

昭和27年（1952） 個人蔵（当館保管）

56 福井復興博チラシ

昭和27年（1952）

個人蔵（当館保管）

57 福井観光案内より 「観光の福井」

昭和27年（1952） 個人蔵（当館保管）

福井復興博覧会を機に作成されたパンフレットで、見開きに福井平野を西から鳥瞰ちようかんした図を載せる。博覧会の第1会場と第2会場を中心に、復興する福井市を大きくデフォルメして描いている。また永平寺や東尋坊などの観光地も比較的大きく表されている。

58 『私たちの郷土 福井県』

昭和27年（1952） 個人蔵（当館保管）

福井県の自然・地理・歴史などを解説する郷土読本である。その序説には立ち上がる郷土として、「その復興はめざましく、まさしく全国一として、外来者の目を見張らせる。この偉大な復興力は、産み貯えた経済の力か、宗教国を誇る信仰の力か、または自然と歴史の環境の中につちかわれた県民性の力か、単に物質だけでは解決できまい」と綴られている。

59 福井市市政週報

福井復興博覧会特集号

昭和27年（1952）

当館蔵

60 復興博覧会写真帖

昭和27年（1952）

当館蔵

61『RECOLLECTIONS OF FUKUI EXHIBITION』(福井博覧会記録集)

昭和27年(1952) 当館蔵

復興博覧会終了後に編集された記録集。各会場のパビリオンの様子を写真と文章で記録している。

62 ある家庭の日記兼用家計簿

昭和25年～40年

当館蔵

坂井郡鷹巣村浜住（現在の福井市浜住町）に暮らした、とある家庭の日記兼用家計簿。日本では明治38年（1905）刊行の『婦人画報』を皮切りに、婦人向け雑誌が相次いで刊行された。本資料の刊行誌である『婦人倶楽部』、『主婦と生活』、『主婦之友』は、親しみやすい実用的な記事を掲載して好評を博した。

本資料には、本家庭の娘が昭和37年に福井大学へ入学した際の諸費用が記されている。授業料（前期分）や入学金、さらに通学や身なりの諸費用を加えると、6月までの支出は合計54730円にのぼった。16000円が支払われている「糸編機」は、女性たちを中心に昭和45年ごろまで続いた「戦後手芸ブーム」の影響を感じさせる。なお、同年の国家公務員上級甲種（現在の国家公務員総合職にあたる）の新卒者初任給は15700円であった。

63 写真 日之出商店街

（福井市広報課写真帳）

昭和29年（1954）撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

日之出商店街は、大正9年（1920）に現在のガレリア元町付近に開設した「日之出公設市場」から始まる商業地で、戦震災で市街が壊滅した際は、いち早く露店が立って復興の先駆けとなった。「日之出」の名称は当時の町名「日之出下町」に由来する。

64 写真 福井市中央公園の

「くまがいこどもえん」

昭和31年（1956）撮影 当館蔵

※AIによる着色加工

くまがいこどもえんは、昭和31年5月に福井市中央公園内に開園した児童遊園地である。熊谷組の会長であつた熊谷三太郎（熊谷太三郎の父）の五周年忌を記念し、熊谷組が建設し福井市に寄贈したもので、広さ約1000坪、児童館の建物や屋内外の各種遊具が備えられた、全国にも例のない児童専用公園であつた。

65 福井市新町名市街図

昭和31年（1956） 当館蔵

昭和30年（1955）、町界町名の整理が行われ、明治7年（1874）の町名改正から使い続けられてきた町割と町名が変更された。従来の町名は尊重されたが、上町・中町・下町の呼称が廃され、大手町一丁目のような丁目方式が採用された。この地図は、新町名の周知を目的に福井新聞社から発行されたものである。

66 福井市街図

昭和33年（1958） 当館蔵

福井市小学校社会科研究部編の福井市街図である。復興都市計画事業が順調に進み、区画や道路、官公庁、学校、公園の配置などは、現在もほぼ変わらない。福井市の中心市街地は、熊谷市政が築いた都市基盤の上に成り立っていることがよく分かる。

67 第1回福井まつり広告

昭和29年（1954） 個人蔵（当館保管）

福井まつりは、福井市が空襲、地震の災禍から
「不死鳥」^{ふしちよう}のように復興を遂げたことを全市を挙げ
て祝福し、さらに大発展を図ろうと、昭和29年か
ら始められた夏まつりである。当初は、開会式典
に合わせて戦争、震災の死者の慰霊祭が行われた
ほか、カーニバル、商店での売り出し、花火大会
も行われた「慰霊と復興感謝」の行事だった。

その後、年を追うごとに催しが増え、何百台も
の自動車が出場する広告カーニバル（宣伝装飾車
パレード）や仮装カーニバル、音楽パレードに
民謡パレード、ちんどん屋や曲太鼓の共演などで
賑わった。

昭和58年、第30回記念大会を機に「福井フェニッ
クスまつり」に改名し現在に続いている。

68 福井まつり記録写真

昭和31年（1956）撮影 当館蔵

昭和31年の第三回福井まつりの様子が写さ
れている。市役所前の通りや駅前での大規模
なパレードや市民球場での民踊の様子がおさ
められている。

69 熊谷太三郎「震災十周年を迎えて」

（福井市市政週報No212）

昭和33年（1958） 6月25日発行

個人蔵（当館保管）

福井震災10周年となる昭和33年6月25日号の市政週報に文章を寄せた熊谷は、震災の惨状を見渡しながら「日本一不幸なこの福井市を必ず日本一幸福な街にしてみせる」と念願したこと、「起ち上がった街福井」「希望にみちた安住の都ふくい」と言える水準まで復興事業を進めることができたこと、復興は熊谷市政を信頼し協力した市民あつてのことであり、同時に市外県外の多くの人達の恩恵によるものであったこと、市民の真実尊重の精神復興を冀求していることなどを綴っている。

70 写真帳 「ふくいめぐり」

昭和29年頃 当館蔵

復興した福井市内の名所を写真で紹介しながらめぐる写真帳である。

展示しているのは養浩館のページで、昭和20年の空襲で御茶屋等の建物が焼け落ち、震災後も野晒し状態であった養浩館が、貸会館の「養浩館」として復興した様子が写されている。

71 福井観光絵はがき

昭和30年頃 当館蔵

昭和30年頃に販売された福井市の観光絵はがき。
新しく整備された福井駅やその周辺、昭和28年に
開館した郷土歴史館（当館の前身）も見える。

72 不死鳥のねがい（福井市市民憲章）

昭和39年（1964）6月28日制定

福井市

昭和39年、震災記念日となる6月28日に開かれた「不死鳥のねがい 市民のつどい」において公表された市民憲章である。「不死鳥のねがい」は前文と5項目の活動指針から成るが、前文で活動指針の前提となる目的、精神が謳われ、5項目の活動指針ではまちづくりの具体像が示された。

市民が愛市運動を展開する上での一種の合い言葉として制定された「不死鳥のねがい」は、市民の集う集会や大会の冒頭に唱和されるようになり、その慣行は今に続いている。不死永生の象徴である「不死鳥」の精神は、復興が成った後も、市民の間に引き継がれているのである。

展示しているものは、旧福井市文化会館に掲げられていたものである。